

多摩地域史研究会会報

第161号 2024(令和6)年7月15日発行

〒207-0033 東京都小平市豊4-17-25-1-105 既原方

Tel: 042-5497-0100 E-mail: tamaden@yahoo.co.jp

Fax: 042-563-2890 ホームページ: 既原方

【第32回大会報告】大会は6月23日(日)雨天の中、東京都埋蔵文化財センター協力のもと、同所会議室で行なわれました。参加者は40名でした。以下は今大会の主催者である北村拓氏による総括です。

多摩の鉄道史V—地元史料から見る鉄道—を開催して

北村 拓

(東京都立国分寺高等学校教諭)

はじめに

これまでほぼ4年周期で開催してきた「多摩の鉄道史」は、5回目を迎えた。今回のテーマは、沿線開発や未成線といった、史実そのものを追ってきた従来の大会とは趣向を変え、「史料」を切り口に設定した。「鉄道『史』」と銘打っているからには、その土台には「史料」がなければならない。その「史料」は、文書に限らず、絵図から実物まで多岐にわたるものである。それらをどのように活用し、将来へ継承していくのか、様々な立場から鉄道に関わる史料を扱う方々にご発表願おうというのが、そもそもの出発点であった。

そこで、冒頭の「趣旨説明」では、学問分野としての「鉄道史」の成り立ちから語り起こし、その研究と資料がどのように関わってきたか、そしてどのように継承されていくかという観点から今大会での議論を展開していきたいという見通しを提示した。

4本の研究報告から

第1報告は、武蔵村山観光まちづくり協会事務局長の山田義高氏「阪東鉄道とその史料」である。阪東鉄道については前回「未成線」の大会

でも山田氏にご登場願っているが、前回の「宿題」への答えを交える形で話していただいた。

その「宿題」とは、質疑応答や「大会参加記」で三村章氏が挙げられた「多摩川をどこで渡るのか」というものであった。今回、山田氏は仮免許申請の時点で作成された計画に基づく「阪東鉄道路線平面略図」(『発起趣意書』添付)の内容を現在の地図に落とし込むという方法を取り、福島村(現在の多摩大橋付近)で多摩川を渡っていたと推測した。その結論は納得できるものだが、発表者の間で議論になったのは狭山丘陵を越えるルートであった。現在の山口貯水池(狭山湖)西端近くの谷筋を2箇所乗り越える計画と見られ、鉄道の敷設計画としては不合理と思われたのである。日光街道(脇往還)に沿うように計画された豊岡-熊谷間を、八王子-中藤間のルートに円滑につなぐには狭山丘陵西部を乗り越えるように作図するしかなかっただろう。あくまでも机上の計画であり、計画が実現していたならば、この「平面略図」とはかなり異なる経路を通ることになったと思われる。

山田氏は、大正3年(1914)の起業目論見書変更での大幅な計画縮小について、第2次大隈重信内閣成立にともなう政治的な変動が背景にある